

潜水士 — 渋谷正信 [後編]

ダイビング好きが高じて安定した生活を送れる会社員をやめ、潜水士の道を歩みだした渋谷正信。

しかし、その前途は決して洋々とは言えないものであった。

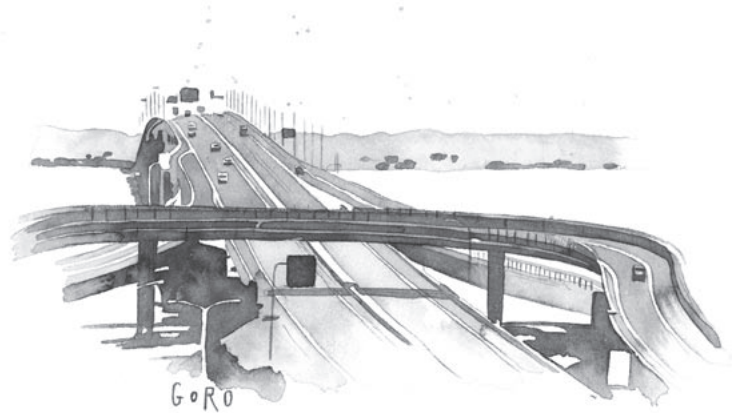
潜水士として駆け出しのころに経験した

水中作業技術の鍛錬にまつわる象徴的なエピソードと、

現在経営する会社での育成方針を聞いた。



プロの作業潜水士となってからも、現場では試行錯誤の連続だった。さまざまな経験を積む過程で悟った「準備の大切さ」を、後進のダイバーにも教え込む。(写真：坂中雄紀)



東京湾アクアライン

潜水学校では学べなかったこと

大会社に勤め、将来を囑望されていたにもかかわらず、その安定した生活を捨てて潜水士への転身を図った渋谷正信。しかし、彼が潜水学校を卒業した昭和四十八（一九七三）年は、第一次オイルショックで高度経済成長が終焉を迎えた年でもあった。各地の海洋開発事業が一斉に見直され、縮小を余儀なくされた結果、渋谷の活躍の道は閉ざされてしまう。

「潜水学校に通う間は無職ですから、奥さんに働いてもらって通ってたわけです。ヒモですよね（笑）。その代わり、潜水士になったらたく

さん稼げるから、それで楽させてやるって大見得切ってたんですけどね…」

作業潜水士の仕事がないため、渋谷は学校に残り、研究部門のダイバーとして働いた。しかし数年後にはその研究所も閉鎖され、いよいよ路頭に迷った渋谷は、潜水学校時代の友人のつてを頼って港湾建設の現場に出ることになる。

「ダイバーにもいろいろあって、海の生物研究や実験をやる仕事もあります。でもこの『作業潜水士』っていうのはほんとに変った職業で、陸では別々の業者がやるような鉄筋・型枠・コンクリートなんかを一人で全部やるわけですから、何でも浅く広くできなきゃいけない」

潜水学校でも一通りの技術は教わったが、「学校でならなかったことは、正直言って使いたいものになりませんでした。学校は事故を起こさないことが第一だから、例えば溶接の訓練でも、溶接棒を取り換える時にいちいち電気を切ってるんですけど、現場でそんなことやってたら仕事にならないわけです」

ある発電所の現場に初めて出た時、となりで作業している人と自分とで、溶接作業のペースがあまりに違うことに驚いた。渋谷は学校でなかったとおり溶接棒交換のたびに陸に上がり、機械のスイッチを切って取り換えていたが、となりの潜水士は上陸した形跡が全くない。半日



しぶや・まさのぶ◎1949(昭和24)年、北海道生まれ。幼少時より泳ぐことへの憧れが強く、最初の就職先で会社の水泳部に入部。さらに高じて潜水士の資格を取得、海洋土木・建築現場の作業潜水士となる。携わった事業は「横浜ベイブリッジ」「東京湾アクアライン」など多数。現在は渋谷潜水工業・社長、またダイバー養成校「水中塾」塾長も勤める。

「海に喜んでもらえるような仕事を、そんな『心の技術』を持つ潜水士を育てていきたい」

使える、仕事の計画も練れる、そういう『つぶし』のきく人を育ててくれるんです」
さらに今は、『潜水技術』『作業技術』に加えて、三つ目の要素の必要性も説いている。
「それは『心の技術』。我々は海という大自然を相手に仕事しているんで、海への感謝を忘れてはいけないし、海が喜ぶものをつくらなきゃいけない。本当のお客さんは発注者でもゼネコ



フーカー式用ポンペ



右/海中は、一つのミスが生死を分けかねない危険な現場。たとえわかりきっているような事柄でも、曖昧な言葉や表現には厳しい指摘を下す。(写真：坂中雄紀)
左/水中では、陸上と同じようなコミュニケーションはできない。その分、事前の計画をより綿密に練る必要がある。

かかって一〇本そこそこの渋谷に対して、その潜水士は同じ時間で一五〇本以上溶接していた。「いったいどんな手を使ってるんだろう?」

水中作業は「見えない仕事」

「東京湾の仕事だったのが幸いでした。水の透明度が低いから、すぐそばまで行ってこっそり見ても息を止めてればわからない(笑)」。で、見ていたら、水の中で機械も止めずに、平気で溶接棒を取り換えてるわけですよ」

「水の中って、陸の上と違って他の人の作業が見えないでしょ。だから何でも自分で考えて効率的な方法を編み出さなきゃいけない。自分の周囲すらよくわからない、他人がどこで何やってるかも見えない中で、自分で一日の仕事の流れを考えて組み立てる…水質が悪い東京湾でやったからこそ、腕が上がったんですね」

それからの渋谷は、現場に向かうたびに「一人で効率よく作業を進めるには何をどう準備すればよいか」を第一に考え、自分なりの方法を確立していった。そうして重ねた経験が、今は後進の指導にも生かされている。

「潜水士に限らず昔から職人の間で言われてきたことなんですけど、『段取り七分』っていうんです。現場に行つてからの準備も大事だけど、そのさらに前の計画、手順をきっちり決めてお

くことが重要なんだ、そうしないと命がいくつあっても足りないんだっていうことを、今の若手にも叩き込んでるところですね」

渋谷潜水工業の育成方針

「以前は作業潜水士になりたいなんていう人は少なかったんですけど、テレビで紹介されてからというもの、水産高校の海洋学科や潜水学校の卒業生がウチの門を叩くようになりました」
何をやってもうまくゆかず、多くの職を転々としてきたような「あぶれもの(渋谷談)」の中途採用がほとんどだったところに比べれば、夢を持った若者が入ってきているという。

それにしても、潜水技術は言うに及ばず、海流・天候を読む力、水中であらゆる建設作業をこなす施工技術、そして作業の段取りや手順を考える施工管理能力など、想像以上に多彩な資質が求められる作業潜水士。渋谷のようなスペシャリストの後継者は育っているのだろうか?

「幹部の中には、私の代わりに現場に行かせて、同じように指示したり判断したりできるような人材が何人かいますよ。それに、潜水士はいつまでもできる仕事じゃない。それを命がけでやってくれたわけだから、その後の人生にも責任を持たなきゃいけない。だからダイビングだけじゃなく、プレゼンもできる、パソコンも

ンでもない、海なんだよと」

海を職場としている以上、海を大切に残していかなければ先はない。潜水士は、いわば地球の水中の行く末を担う職人。

「潜水技術も器具も、みんな海外から伝わったもの。でもこの『心の技術』だけは、日本から世界に発信したい」
これが、渋谷の当面の野望だ。